フィールド（現場）からの風 (604)

宮田守男

今週8日には二十四節気の「小暑」を迎える。雨空の雲間からは時折強い陽射しが注ぎ、日に日に暑さが強まってくる時期になる。気温が上がる時期に勢いを増す紫外線は目に見えない厄介な相手で肌のトラブルの原因になる。環境省によると、日本人はダメージを抑える表皮の角質層が、白人と黒人の3分の2ほどで、毎日入浴する日本人の生活習慣が影響していると分析している。遮ってくれる物質が少ない空気がきれいな地域に住む私たちは特に注意が求められているのだろう。

6月中旬、農作業をしていると白馬中学校から下校中の生徒からはっきりした声で「こんにちは」のあいさつ。白馬中学校の教育ビジョン「出会い　ふれあい　支え合い　伝えあい　喜びあい　美いあい　学びあう」を実践している現場に出会うことができてうれしくなる。何げないあいさつがこれほど素晴らしいと改めて学ぶ事ができた。知って・考えて・行動実践する人間性豊かな社会人になると信じたい。

戦争の怖さを学ぼう

国際紛争の平和的解決や平和維持を目的に設立されたスウェーデンのシンクタンク「ストックホルム国際平和研究所」は1月時点で中国が保有する核弾頭数が昨年同月から90発増え、推計500発になったと発表。実戦配備は米ロ、英国、フランスで中国が加われば5カ国。古代ローマ帝国時代に攻撃的な他国を軍備によって抑制し、戦争を防ぐ格言の「平和を望むならば戦争に備えよ」の格言が今なお実践されている。人類の歴史なのだろうが実践されてしまえばと恐怖感を覚えてしまう。英国生まれのオルダス・ハクスリーの米誌に寄稿した随想に「人は歴史の教訓からそれほど多くを学ばないということは、歴史が教えるべき最も重要な教訓だ」との一文がある。

沖縄全戦没者追悼式で小学2年生が朗読した詩は、美術館で戦争の絵を見た時の思いをつづったものだった。たくさんの死者や骨の描かれた作品を見て、急に怖くなった少女は母親に体を寄せて、ようやくほっとする。「これがへいわなのかな」「へいわをしって　へいわがわかった」と結ばれた内容が心に残っている。日本でも悲惨な戦争体験をした人は数少なくなってきている。今ある平和を大切に守って行くには、戦争の怖さを強く感じることから始めるしかないのだろう。

（信州地域社会フォーラム会員・白馬村森上）

農地の一角に咲く青「ノアヤメ」を刈らずに残す大切さ。花言葉の「希望・よい便り」につながればと想う。